C 類　丁寧な作りである。口縁部が内湾する。丸底。内面は丁寧に斜放射状のミガキを施す。図示したのは H10 － 5 のみである。また H10 － 7 はこの類型の坏に短い脚部を貼り付けたものである。明赤褐～橙に発色し、焼成良好。A 類と形態的差異は著しいものの胎土や焼成が類似している。

D 類　口縁部を直立または内屈させ、体部との境界が緩く稜を成すもの。平底のものと丸底のもの両方を含めた。H1－1、H2－2、H10－6などが該当し、この類型は中村倉司氏によって擬模倣坏と分類されたものに類似する(註2)。H1 － 1 は平底で直線的な体部の立ち上がりを見せるものだが、類似のものに六供遺跡群№ 6（H － 1）、泉沢谷津（1 住）、荒砥北三木堂Ⅰ（2 区 42 住）、荒砥下押切Ⅱ（8 住）などが挙げられる。H2 － 2 は丸底を呈するもので、類似するものに六供遺跡群№ 5（H － 7）、荒砥下押切Ⅱ（8 住）、荒砥北三木堂Ⅰ（2 区 30 住）等が挙げられる。

E 類　H1 － 2 のみ。遺跡全体の破片の中でも類するものは見出せなかった。

本遺跡出土の坏は概ね以上のように分類される。今回抽出した D 類は周辺遺跡を概観しても定量出土が認められるものである。また、具体的な計量は伴わないが、A 類とした内斜口縁坏が破片も含めて全体の 7 ～ 8 割程度を占める点、また模倣坏の共伴がほぼ皆無であった点が特徴的である。

高坏　脚部形態に特徴が現れる。柱状に近く脚裾が屈折するもの（H1 － 6）、円錐状に開き脚裾で屈折するもの（H1 － 5）の二つの類型が主体的である。これに加えて H10 － 7 の様に短脚のもの、H10 － 9 の様に脚裾に段、稜をもつもの、H10 － 8 の様に大型のものがある。後者のもので特に 7・9 は 5 世紀後半に出現するものであり該期における高坏の組成の特徴を示しているといえる。概して脚部成形時にシボリが加えられ、脚部内面は粘土紐巻き上げの成形痕を削りとるものが多いが、未調整のものもある。

甕　H1 － 8、D1 － 3 の様に球胴を呈するものもあるが、大概は胴部中位に最大径を持ちながらも長胴化している。口縁部も外反傾向にあるものの、頸部内面に稜を残し「く」の字の屈曲を見せるものもある。底部は H10 － 22 の様に輪台状を呈するものがあり、破片から見ても定量存在する様である。器外面の調整は、ミガキやハケの施されるものは少なく、ヘラケズリのものが多い印象を受けるが、大抵はヘラケズリ後のナデ調整で磨り消される場合が多い。器内面は概ねヘラケズリ・ナデ調整によって平滑に整えられるが、胴部上半に輪積痕や成形時の指頭痕を残すものも多い。なお、H10 － 22・23 の事例から甕には法量分化している様子も窺われる。小型甕も甕の形態変化と相関し長胴化しているものも見受けられる（H10 － 19）。

その他の器種　ほかには坩・壷・甑等が確認された。坩は小形のものはなく、胴部がやや扁平な球胴を呈するものが多い。口縁部の欠損したものが多いが、大概は H10 － 10 の様に短めで外傾する口縁がつくのであろう。壷には H10 － 15 の様な球胴のものと、D1 － 2 の様に底部から体部が直線的に立ち上がり、胴部中位に最大径を持つ形状のものが確認された。D1 － 1 の壷は、法量・形状から須恵器大甕を模したものと思われる。甑は大型・小型両方が確認される。小型甑は鉢型で単孔のもの（H9 － 1、H10 － 17）である。大型のものは、甕形で胴部に張りを残し、底部を大きく刳り抜くタイプ（H10 － 20）のものである。

胎土　本遺跡出土の土器の中には結晶片岩を生地土に混ぜる個体が散見されるほか（H1 － 8、H10 － 21、D1 － 1 等）、ごく微量白色針状物質が混ざる個体も見受けられた（H10 － 13）。こうした胎土の特徴をもつものは遺跡の中でも客体的である。また、結晶片岩を含むものは藤岡方面を中心とした地域に産地が類推されるものでもあり、共同体の自給的な供給圏を越えて流入した可能性が想起される。年代は下るが H8 － 1 もいわゆる有段口縁坏(註3)であり他地域からの搬入品である。この様に他地域の土器が客体的に集落に混ざる現象に検討を加えることは、古墳時代中～後期における地域経済の実態に迫るうえで注視すべき点であると思われる(註4)。

特殊な遺物について

H － 7・8 出土の樽形瓶　H － 7・8 覆土からは樽形瓶の破片が出土したが、小片 2 点のため復元実測し図示した。樽形瓶の器種の消長と遺構の年代から本来的には H － 7 に帰属するものであろう。県内の出土事例は少ないものの、前橋市白藤古墳群 Y － 6 号墳、前橋市荒砥北三木堂遺跡、前橋市泉沢谷津遺跡、前橋市荒砥天之宮遺跡、伊勢崎

市大門遺跡[註5]、太田市前沖遺跡、藤岡市温井遺跡等での出土が確認されている（Fig.3）。

H－10 出土の車輪石に似た石製模造品　H－10 北東隅床面直上から環状の滑石製石製模造品が出土した。形状は円形で外径 4.0㎝、内径 2.0㎝を測る。その断面形状から車輪石など腕飾形の装身具を模したものと考えられ、釧形模造品とした。同形のものには茨城県屋代 A 遺跡 61 住のものがあり、形状の相違を問わなければ釧形模造品の類例として、県内に藤岡市白石稲荷山古墳、前橋市上細井稲荷山古墳に事例があるほか、福島県建鉾山遺跡でも確認される。

H－10 カマド出土の貝巣穴泥岩　H－10 カマド覆土から被熱した貝巣穴泥岩が出土している。貝巣穴泥岩はしばしば古墳時代の竪穴住居跡から出土することがあり、これまで海浜地域との交流が漠然と指摘される事もあったが、その性格や存在意義について不明であった。坂本和俊氏はこれを古墳時代における関東の製塩技法と運搬方法の点から説明している。氏は古墳時代における関東の製塩技法が藻塩焼であると仮定し、また藻塩焼において生じた灰を団子状にして運搬し流通させたと考えている。貝巣穴泥岩はこの藻塩焼の過程[註6]で混ざったものであり、竪穴住居内で灰団子を水に戻し煮詰めて塩分を得る時に不純物として取り除かれたものと想定している。氏の見解は、考古学的実証性は希薄であったとしても、群馬県のような内陸部の古墳時代社会を考える上でも示唆に富んでいる[註7]。

（註 1）年代観については主に該期の住居跡が多く検出されている前橋市荒砥周辺地域での発掘調査成果や、和泉式期の編年を取り扱った東国土器研究 5 号を参考とした。

（註 2）中村氏はこれを「意識の上で須恵器を模倣した」とし、模倣坏の出現に先行して成立すると位置づけ細分を図っている。概ね 5 世紀中葉から広い地域で坩、甑、高坏などの一部に須恵器模倣形態をとる器種の出土事例が散見される。これを坂口一氏が勝保沢中ノ山遺跡の中で「鬼高式に先行する言わば「須恵器指向型」の萌芽的段階」と指摘したように、該期の土器群の特徴や性格を示すものであろう。模倣対象である須恵器坏との形態的差異は著しいものの、本遺跡 D 類においても口縁を内屈させる点や、周辺遺跡の出土事例には稜部に沈線を巡らす事例もあり、「模倣」の基準をどこに定めるかの問題もあるが、一定の須恵器の影響を認めてもよさそうである。

（註 3）本来は埼玉県城北遺跡や新屋敷東遺跡など埼玉県深谷市周辺地域に分布の中心をもつ類型とされる。

（註 4）例えば田中広明氏は古墳時代土師器坏の類型の中に広域な分布を見せるものに注目し、その要因を複合再分配という概念から説明した（田中　1989）。また古墳時代後期において遺跡から他地域の土器が混合して出土する現象について在地首長層間の交流と共同体内での儀礼的交換の過程で生じるものとして具体的に説明している（田中　1992）。

（註 5）未報告。伊勢崎市赤堀歴史民俗資料館に展示。

（註 6）坂本氏は房総半島や三浦半島など海辺に貝巣穴泥岩の露頭のある場所で製塩を行った場合に貝巣穴泥岩が灰団子に混ざる可能性を指摘している。

（註 7）坂本氏は『厩牧令』に触れ牛馬の飼育に恒常的に塩が必要であったことを指摘しており、内陸部での馬の飼育に必要な塩の供給方法が、考古資料としてどのような現象形態をとるのかを問題としている。貝巣穴泥岩と製塩技法の関係性は、馬飼育が想定される埼玉県城北遺跡周辺の住居跡に貝巣穴泥岩の出土が多いことからの着想の様である。ともあれ、古墳時代後期の群馬県下において馬飼育が盛んであったことは周知の事実であり、氏の提示した視点には興味を惹かれるものがある。

3　まとめにかえて

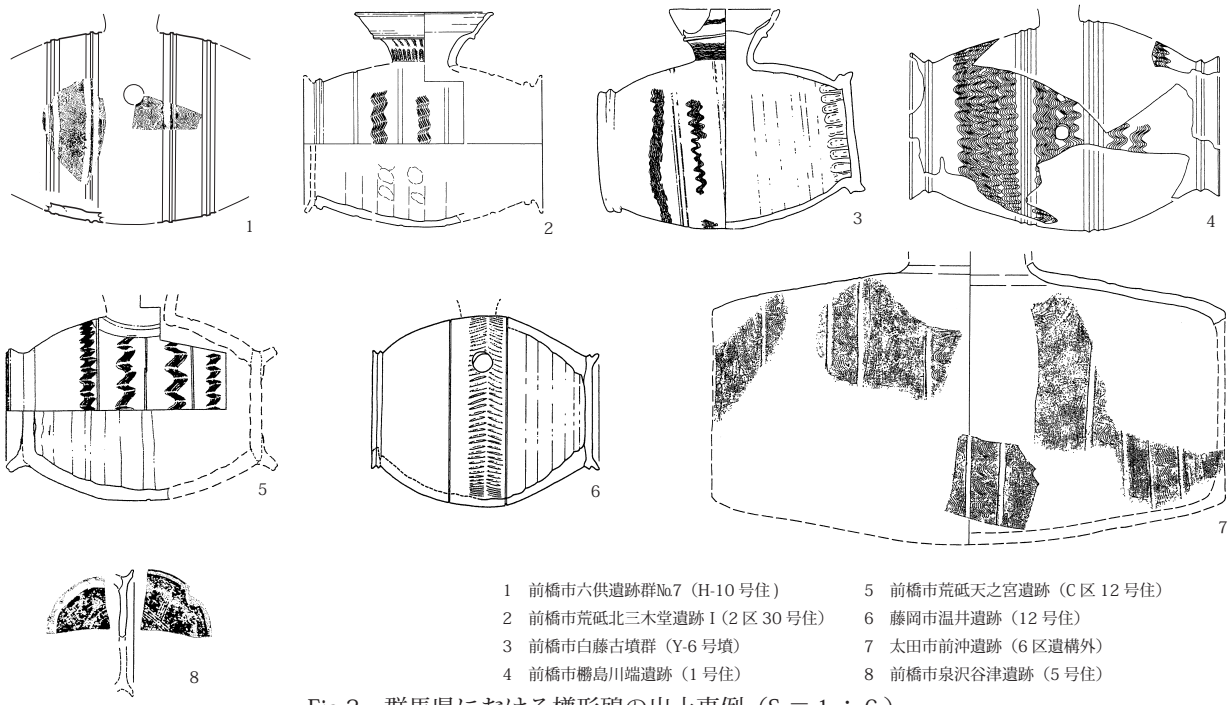
近年六供遺跡群以南の前橋南部地域では調査事例が増加しつつある。遺跡個別では調査面積が狭く得られる情報も断片的なこともしばしばだが、次第に様相が明らかになりつつある。前橋南部地域は現況においても水田地帯が広がる地域であり、もともとこの地域が伝統的に水田稲作を主要な生産基盤としてきたことは想像に難くない。前橋市南部地域の前橋台地上の低地帯ではかつては広く条里型地割が認められ、これまでの発掘調査においても As－B 下での水田遺構の検出事例が豊富である。近年では古墳時代に遡る水田遺構も随所で確認されている。

古墳時代においても同様にそこに形成される地域社会は水田稲作を基盤に成立していたと考えられる。また、用水路の開鑿などを必要とする低地帯の開発は集約的な労働を伴うものであり、水田経営と表裏一体である水利権などの社会的関係は当然一集落で完結するような性格のものではないであろう。それゆえに古墳時代においても本遺跡の立地する前橋台地上には灌漑体系を前提とした広域なネットワークが形成されていたことが想定される。また、本遺跡周辺における低地帯の開発においては、旧利根川流路にあたる広瀬川水系からの引水を前提にしていたと思われるが[註1]、これを水源として考えるとき、六供地区以北の前橋市街地もその開発に関連する区域として視野におさめておく必要があると思われる。なお、前橋市街地における龍海院裏古墳や前橋 9 号墳の存在は周辺地域の「開発」を考える上で示唆的であると思われる。

ともあれ、古墳時代前期に本格的に始まるであろう前橋台地上における低地帯の開発が、その後の時代を含めてどのように展開し変遷をたどるのか今後具体的に明らかにしてゆく必要があると思われる。これまで蓄積された資

料の精査と整理及び今後の調査成果の活用から、地域の歴史的景観と変遷過程を復元してゆくことが望まれる。今回の調査の成果は断片的である。しかしその一片が地域の開発史や景観史を再構成するための一助となれば幸いである。

（註 1）関口功一氏の古墳時代における前橋台地東辺部の開発過程に関する検討（関口　2011，2012）の中で、馬場川と女溝の関係について触れている点や、櫛島用水が等高線にやや並走して南西流する走向をとる様は当時の六供集落付近の水田地帯における導水方法を考えるときにおいても示唆的である。



1　前橋市六供遺跡群№7（H-10 号住）
2　前橋市荒砥北三木堂遺跡Ⅰ（2 区 30 号住）
3　前橋市白藤古墳群（Y-6 号墳）
4　前橋市櫛島川端遺跡（1 号住）
5　前橋市荒砥天之宮遺跡（C 区 12 号住）
6　藤岡市温井遺跡（12 号住）
7　太田市前沖遺跡（6 区遺構外）
8　前橋市泉沢谷津遺跡（5 号住）

Fig.3　群馬県における樽形甕の出土事例（S ＝ 1 ： 6）

引用・参考文献

井野修二　1984『小神明遺跡群Ⅱ』　前橋市教育委員会
鵜木晋一ほか 1983『中大門遺跡』　前橋市教育委員会
笠原仁史ほか 2008『前橋城　車橋門丸馬出遺構の調査』　前橋市教育委員会
神谷佳明　1993『下芝五反田遺跡』　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団
菊池実他　1999『荒砥下押切遺跡Ⅱ　荒砥中屋敷Ⅱ遺跡』　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団
小島純一　1989『白藤古墳群』　勢多郡粕川村教育委員会
後藤守一ほか 1936『群馬縣史蹟名勝天然記念物調査報告　第三輯　多野郡平井村白石稲荷山古墳』群馬県
権田友寿ほか 2010『六供遺跡群№ 6』　前橋市教育委員会
坂口一ほか　1988『勝保沢中ノ山遺跡Ⅰ』　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団
坂口一ほか　1991『荒砥北三木堂遺跡Ⅰ』　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団
坂口好孝　1998『六供下堂木Ⅱ遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団
坂本和俊　2012「古墳築造の基盤となった集落と首長居館」『第 57 回文化財講習会資料』埼玉県文化財保護協会
下條正ほか　1996『櫛島・川端遺跡』　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団
下條正ほか　1997『櫛島・川端遺跡　公田東遺跡　公田池尻遺跡』㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団
スナガ環境測設株式会社　1988『生川遺跡』　前橋市埋蔵文化財発掘調査団
関口功一　2011「前橋低地周辺の「開発」を巡る二・三の憶説」『群馬歴史民俗』第 32 号　群馬歴史民俗研究会
関口功一　2012『上毛野の古代農業景観』　岩田書院
高島英之ほか 1998『公田東遺跡』　警察宿舎遺跡調査会
田中広明　1989「上毛野・北武蔵の古墳時代の土器生産－土器生産の転換と在地首長制」『東国土器研究』第 2 号　東国土器研究会
田中広明　1995「関東西部における律令制成立までの土器様相と歴史的動向－群馬・埼玉県を中心にして－」『東国土器研究』第 4 号　東国土器研究会
東国土器研究会　1999『東国土器研究』第 5 号
徳江秀夫ほか 1980『荒砥天之宮遺跡』　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団
徳江秀夫ほか 2005『泉沢谷津遺跡』　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団
中村倉司　1999『岡部条里／戸森前』㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団
新倉明彦　2004『前沖遺跡』　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団
林喜久夫　1983『後閑団地遺跡』　前橋市埋蔵文化財発掘調査団
坂野和信　1991『土曜考古』第 16 号 土曜考古研究会
東日本埋蔵文化財研究会　1993『第 2 回東日本埋蔵文化財研究会　古墳時代の祭祀－祭祀関係の遺跡と遺物－』第Ⅰ分冊
前田和昭ほか 2006『文京町№ 1 遺跡』　前橋市教育委員会
真下高幸ほか 1981『温井遺跡』　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団
松田猛ほか　1990『西大室丸山遺跡』　群馬県教育委員会
山口逸弘　2007『吹屋糀屋遺跡』　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団
山田誠司ほか 2009『六供遺跡群№ 5』　前橋市埋蔵文化財発掘調査団
吉田聖二　1999『六供東京安寺』　前橋市埋蔵文化財発掘調査団
群馬県史編さん委員会　1990『群馬県史』通史編 1 原始古代 1　群馬県
前橋市史編さん委員会　1971『前橋市史』第 1 巻　前橋市